

『土佐日記』英訳ことはじめ

—フローラ・ベスト・ハリスの業績

大野ロベルト

はじめに

日本の古典文学が本格的に海外に翻訳・紹介されるようになるのは十九世紀後半であるが、その過程や書誌、海外での受容や評価については埋もれているものも多い。例えば『竹取物語』は一八八八年のデイキンズによる翻訳が最古とされることが一般的だが、抄訳とはいえそれ以前にランゲによる翻訳もあつたとされる¹⁾。『源氏物語』のように存在感の大きな作品でさえ、一九二五年に刊行が開始されたアーサー・ウェイリーによる著名な翻訳にばかり注目が集まり、その四十年以上も前の一八八二年に試みられた末松謙澄による

翻訳はさほど研究されてこなかった²⁾。古典研究全体の国際化が求められている昨今、その一つの基盤ともなりうる古典の翻訳をめぐる研究については、大いに進展が俟たれるところであろう。

本稿ではこのような問題意識から、初めて『土佐日記』を英訳したフローラ・ベスト・ハリス (Flora Best Harris、一八五〇—一九〇九) について、その評伝と訳業の成立事情を中心に検討する。抄訳も含めると『土佐日記』はその後もW・G・アストン (一八九九)、ウィリアム・N・ポーター (一九二二)、G・W・サージエント (一九五五)、アール・マイナー (一九六九)、ヘレン・C・マツカラ (一九八五) などによって翻訳されることになるが³⁾、ハリスによるものは最も古く、なおかつ完訳である。しかもハリスは、一八八二年、一八九一

年、そして死の翌年である一九一〇年と、三度も『土佐日記』の英訳を世に問うた、史上唯一の翻訳者なのである。このような興味深い事情にもかかわらず、本稿でも後述するように、ハリスについて正面から扱う研究は皆無にひとしい。

原文と対照させた場合、ハリスの訳文にはどのような特徴があるのか。その特徴からは、何が読み取れるのか。そして何より、訳文は三度の試みを通じて、どのように彫琢を施されたのか。これらの問いは、いずれも掘り下げられるべきものである。しかし、これまで未知であった人物については、その足跡と業績を整理するだけでも、相当の紙幅を必要とするのは必至であろう。したがって訳文の質的問題に本格的に踏み込むことは今後の課題とし、本稿はそのための助走に過ぎないことを最初に明言しておきたい。むしろ本稿では、これまでの研究史において周縁化されていたハリスを、ジャパノロジー黎明期に正しく位置づけることに注力しよう。とくに後段で詳述するように、一八八二年という早い時期に『土佐日記』が翻訳されていたことは先行研究では特定されていなかった事実であり、これにより『土佐日記』英訳の「ことはじめ」は、従前の理解よりも九年ほど早まることになる。

一 ハリスの生涯

ハリスの伝記資料は乏しい。一書としてまとまっているのは、管見のかぎり山鹿旗之進（一八六〇—一九五四）による『はりす夫人』（教文館、一九一一）のみである。他に新谷武四郎が刊行した私家版の資料が二点あるが、『ハリス夫人訳 土佐日記』（一九七三）はハリスによる英訳『土佐日記』（一八九一年版）の複写に、新谷自身による日本語への「重訳」と、簡単な解説を添えたものであり、また『ハリス夫人詩集』（一九七二）もハリスの死後に出版された詩集 *Poems* の和訳であることから、伝記資料としての価値は低い。ただしハリスの夫で、知名度では遥かに優るハリス監督については、主に宣教団の歴史を取り上げる資料などにその活動の一端が記録されており、これらを補助的に活用することができる。以下、基本的には『はりす夫人』に拠る形で論を運ぼう。なお本稿では、あくまで研究対象であるハリスをその姓で呼び、夫のことはファースト・ネームでメリマンと記す。

ハリスは一八五〇年三月十四日、米国ペンシルバニア州のミードヴィルに生まれた。出生時のフルネームはフローラ・リディア・ベストである。父は信心深い医師であった。幼時から病弱であったため、一八六二年にはよりよい環境を求めて州内の祖母の家に移って

いる。当然のごとく信仰の篤い少女となつたハリスだったが、文学にも愛着が深く、ロングフェローなどを愛読した。一八七一年にはアーヴィング女子大学から学士号を受け、その後アレガニー大学からも文学士の学位を得たという。この頃にはすでに外国での伝道に憧れ、とくに中国を訪れてみたいと考えていた。すると折よく幼馴染みのメソジスト監督教会の宣教師、メリマン・コルバート・ハリス（一八四六一―一九二二）に、日本への伝道が命じられたのである。二人はこれをきっかけに一八七三年十月に結婚、すぐに日本へと向かった。

同年十二月十四日に横浜港へ着いた夫妻は、翌年になつてから最初の伝道地である函館へ赴任している。当時、外国人はまだきわめてめずらしく、奇異の視線を向けられたことはもちろんだが、ハリスはむしろ現地人に対する西洋人の粗暴な態度に衝撃を受け、早くも生涯を貫く日本人への愛情を育み始めたという。

一八七六年になると、クラーク博士として知られるウィリアム・スミス・クラーク（一八二六一―一八八六）が札幌農学校の教頭として赴任し、その感化を受けて多くの若者が受洗を望むようになった。これがいわゆる「札幌バンド」の形成期であるが、そこでクラークに依頼され生徒たちの信仰を導いたのが、他ならぬメリマンであった。⁶ 有名な例としては一八七八年六月二日、新渡戸稲造（一八六二―一九三三）と内村鑑三（一八六一―一九三〇）がメリマンによつて

受洗している。

一方のハリスも、メリマンを妻として支えただけではなく、自ら女子教育に注力した。夫婦で設立した日々学校（Day School）に、地域の牧師や実業家、政治家などの家庭から、婦女を生徒に迎えたのである。さらにハリスは日本の教育制度の不備を訴える記事「如何にして婦人を救うべきか」How are We to Reach the Women? を、米国メソジスト監督教会女性海外伝道協会の機関紙『ヒーズン・ウーマンズ・フレンド』に投稿しているが、これが呼び水となつて教師が派遣されるなどした結果、今日も函館にある遺愛学院の基礎が確立された。⁸

ところが一八七七年秋、生来病弱であつたハリスは健康を害してしまう。妊娠中であつたことから、思い切つて帰国し、十二月二十一日、地元ミードヴィルで無事に女兒フローレンスを出産した。そして翌年十月、はるばる迎えに来た夫と共に汽船ペキン号に乗り込み、サンフランシスコから再び日本を目指した。しかしこの旅の途中、夫婦を悲劇が襲う。十月十七日、フローレンスが船中で急死するのである。

やや先走りになるが、このように船旅に臨んで娘を喪つた経験は、やはり滞在先で亡くなった幼い女兒の死を嘆く、「亡児哀悼」という主題を持つ『土佐日記』に触れたときに、ハリスにことさら深い感慨を与えたものだろう。ハリスが生涯を通じて、それも他のテク

ストにほとんど目移りすることなく、ひたすら『土佐日記』に向き合った背景には、そのような個人的事情が影響していたと思われる。蛇足ながら、同じく幼い男児を喪った近世の国学者、富士谷御杖（一七六八—一八二四）がやはり『土佐日記』の研究に向かったことを考え合わせると、この日記文学の受容の一つのあり方が見えてくる。⁹⁾

さて悲しみを抱えながらも、夫妻の使命は続く。函館から東京へと居を移したハリスとメリマンは、一八八〇年には国内伝道旅行へ出かけている。とくに京都滞在は、すでに日本文学への関心を強めていたハリスを喜ばせた。同地では同志社大学を設立した新島襄（一八四三—一八九〇）や、これに協力し、後に第二代の学長となる宣教師ラーネッド（一八四八—一九四三）などとも交流した。

伝道旅行から戻ると、ハリスは築地明石町に創設された青山女学院の前身、海岸女学校の教師となった。さらに、女子は手に職をつけることで自立が可能になるという考えから、再び女性海外伝道協会に対して寄付を訴え、女学院の手芸部を青山手芸学校として独立させる資金を集めている。¹⁰⁾ 因みに現在の青山学院は、一八七四年にやはりメソジストの伝道師であったドーラ・スクーンメーカー（一八五一—一九三四）によって設立された女子小学校に端を発する。ハリス夫妻も一九〇五年以降、青山学院内の監督住宅で生活することになるから、同学院とのゆかりには深いものがある。

海岸女学校に着任した頃には、ハリスはすでに訓話を行えるほど日本語に習熟していたという。『はりす夫人』には、「夫人の最初の和学の教師は神某といふ人であつたが、後ちには何人の推薦にや里見某といへる老人につきて修められ」とある。¹¹⁾ この「里見某」は、元文部省の役人で文法書などの著述があつたという同書の記述から推せば、作曲家の里見義（一八二四—一八八六）であると思われる。

里見は福岡の育徳館の和学教授を務めた後に文法書を出版、一八八一年からは文部省の音楽取調掛（東京藝術大学の前身）で作詞の実践や教育に携わつた。ハリスが東京に来てからの関係とすれば、「老人」という説明も符合する。ハリスも音楽に愛着が深く、日本では「こよなき恵みの」の題で知られる *To Thy Cross, Dear Christ, In Clinging* など多くの賛美歌を作詞していることを思えば、¹²⁾ 里見は単に教師としてよりも同好の士としてハリスを遇したものだろう。だが一八八二年、ハリスは再び病が重なり、单身帰国せざるを得なくなる。一八八五年には夫も後を追つた。それでも夫妻の日本への思いは断ち難く、日露戦争が勃発するとサンフランシスコ港で日本行きの船を見送り、日章旗を振って激励したという。

そして一九〇五年秋、ハリスは三度日本の土を踏む。メリマンが日本の宣教監督に任命されたのである。ハリスはその後、決して日本を出ようとしなかった。夫が朝鮮に派遣されていた時期も、青山学院構内の監督住宅で留守をまもり、一九〇九年九月七日の夜に脳

脊髄膜炎で命を落とすまで、周囲の人々との交流と、日本文化と文学の研究を怠らなかつた。

現在ハリスは娘フローレンス、ならびに一九二二年に没した夫メリマンと共に、青山墓地に埋葬されている。

二 ハリス訳『土佐日記』（一八八二年版）

駆け足ながらハリスの生涯を概観したところで、その最初の『土佐日記』英訳の試みに目を向けてみたい。

現在でも手に取ることのできる一八九一年版、一九一〇年版の単行本とは違い、ハリスの最初の試みについては、詳細はこれまで不明であつた。先行研究においてその存在が示唆されることはあつても、記述はいずれも断片的であつた。

例えば『はりす夫人』には以下のようにある。

彼の土佐日記の反訳の如きも明治十四年十月より翌年の三月病勢漸く重もりていよく帰国せねばならぬやうになりしまで筆をとられたそうである。¹⁴

同書は他ならぬメリマンの依頼で取りまとめられた伝記であるから、「そうである」とはそれがメリマンからの伝聞であることを示

している可能性が高い。また、ハリスの追悼に際して提出されたいくつかの証言もこれと呼応する。まず一九〇九年九月十日、青山学院大講堂で執り行われたハリスの葬儀で、別所梅之助（一八七二—一九四五）は次のような弔辞を読んでいる。

その土佐日記の英訳は、明治廿四年米国の出版にかゝるといへども、実は明治十四年、国学復興以前の稿にかゝる。¹⁵

さらに徳富蘇峰（一八六三—一九五七）も、ハリスの死亡記事を自らの創刊した『國民新聞』に掲載し、「其の英訳土佐日記の如きは実に明治十四年の作とす」と記した。¹⁷ このことから明治十四年、すなわち一八八一年に、ハリスがすでに『土佐日記』を英訳していたという事実が、ある程度まで共有されていたことがわかる。

だが具体的な書誌については、これまで明らかになつていなかったのである。古典文学の翻訳の歴史をまとめた国文学研究資料館の事典では、ハリス訳『土佐日記』は一八九一年版と一九一〇年版の二種しか触れられていない。¹⁸ 一方、様々な国の文学が英訳された歴史をまとめるオックスフォード大学出版局の刊行物には、横浜で発行されていた『ジャパン・メール』紙に、一八九一年版に先んじて英訳『土佐日記』が掲載されたことまでは記載があるが、具体的な日付はない。¹⁹

表1 ハリス訳『土佐日記』連載各回の内容

連載	掲載号	掲載面	本文範囲 (日記日付)
第一回	一八八二・一・七	一四一―一五	一二・二二―一二・二七
第二回	一八八二・一・二二	七四―七五	一二・二八―一・八※
第三回	一八八二・二・四	一三九―一四〇	一・九―一・一四
第四回	一八八二・二・一一	一七〇―一七一	一・一五―一・二〇
第五回	一八八二・二・一八	二〇三―二〇四	一・二二―一・三〇
第六回	一八八二・三・四	二六三―二六五	二・一―二・五
第七回	一八八二・三・一一	二八九―二九一	二・六―二・一六

※原資料所在不明のため欠

『ジャパン・メール』とは親日派の週刊英字新聞で、上海や函館でも暮した実業家のH・G・ハウエルが、すであつた『ジャパン・タイムズ』紙を買収し、一八七〇年からH・N・レイと共に運営していたもので、明治期のいわゆるジャパノロジストたちの投稿も頻繁に掲載された。⁽²⁰⁾ 紙名は何度か変更を経ているが、本稿で取り上げる一八八〇年代前半に関しては、正式名称は *The Japan Weekly Mail, A Weekly Review of Japanese Commerce, Politics, Literature and Art.* であり、その名の通り、日本を中心とするアジアの商業、政治、文芸や芸術の動向と共に、汽車や汽船の時刻表、日本に滞在する外国人の結婚や死亡など、生活上、社交上の情報および話題も提供された。同紙については横浜開港資料館所蔵のものがエディシヨン・シナプスによって復刻版として刊行されており、現在でもその内容に触

れることができる。⁽²¹⁾ 調査の結果、ハリスによる『土佐日記』の最初の英訳は、*Journal of a Voyage from Texas to the Capital* すなわち「土佐から都への旅の日記」という題で、七回に渡って連載されたことがわかった。各回の発表年月日と本文の訳出範囲は表1の通りである。掲載面の数字が累積しているのは、各号ごとに振りなおさず、合本する前提で通年で振られているためである。一八八二年最初の発行である一月七日号から連載が始まっていることを考えると、一八八一年に英訳が完成していたとする前述の証言とも一致する。連載二回目のみ散逸しているが、他の掲載号の記事に欠落はなく、十二月二十一日に始まり二月十六日に至る『土佐日記』五十五日間のすべてが訳出された完訳と見て間違いないだろう。

ところで注目すべきは訳者の署名で、それは連載最終回の末尾に「F・B・H」と頭文字で記されているに過ぎない。後の訳業から遡って調査を行うぶんには頭文字は自然とハリスに結びつくが、さもなければ訳者を特定することは難しい。したがって史上初の『土佐日記』の英訳は、実質匿名と言つてよいのである。⁽²²⁾

寄稿の多くは匿名であるから、ハリスの場合が例外というわけではない。ただ、記事は純粋に訳文のみで、例えば *Hour of the Dog* (戌の時) は午後七時頃に当たる、というような注は全体にいくつかついてはいるものの、『土佐日記』を解説するような記事が前後に別に掲載されているわけではないので、古典に疎い読者には、この

英訳は唐突に感じられたかもしれない。そのなかにあつて唯一示唆的なのが、連載第一回で、冒頭の By Tsurayuki という著者名に付された注である。内容は以下の通り。

Tsurayuki, one of the "sweet singers" of old Japan, flourished in the 10th Century A.D. He is famous for delightful prose as well as verse. His little fiction concerning the feminine authorship of this "Journal," furnishes him with a graceful pretext for writing real Japanese, in a charming style.

古の日本の「甘やかな歌い手」の一人である貫之は、十世紀に活躍した。散文の素晴らしさだけでなく、韻文でも名を馳せた。この「日記」が女性によつて著されたという小さな虚構は、本来の日本語を魅力的な文体で記すための、雅びやかな口実となつているのである。⁽²³⁾

短い一文ではあるが、女性に仮託された日記という、『土佐日記』の特徴に明確に触れたうえで、そのようにして(つまり平仮名で)書かれたものが「本来の日本語」であると述べている点には、ハリスの相当に深い日本文化への理解が透けて見えるのではないだろうか。難を言えば、その『土佐日記』の価値を重んずるあまり、『古今集』の選者であり、当代の和歌の第一人者であつた貫之に對

し、「韻文でも名を馳せた」という評価をしてしまつていふことであらう。だが確かに貫之は歴史を通じて、和歌の名人としてよりも『土佐日記』の作者として評価されがちであつたから、ハリスは国内で定着していた評価をなぞつただけと見ることもできる。

ともあれ、ハリスが紀貫之という歌人や日本語についてどのように考えていたのかをより詳しく探るには、注の形ではなく、まともな「覚書」の形でそれが示されている書籍版の英訳『土佐日記』に目を向ける必要があるだろう。

三 ハリス訳『土佐日記』(一八九二年版)

ハリスによる『土佐日記』の英訳のうち、最初に書籍の形で上梓されたのは *Log of a Japanese Journey from the Province of Tosa to the Capital* すなわち『土佐地方から都への日本の旅の日記』である。版元はハリスの生地ミッドヴィルに拠点を置くフラッド&ヴィンセント社 Flood & Vincent で、刊行は一八九一年である。本書に関しては国立国会図書館などにも収蔵があるが、本稿で取り上げるコロンビア大学所蔵本(以下「コロンビア本」と記す)やハーバード大学所蔵本(以下「ハーバード本」)はグーグル・ブックスへの委託により電子化されており、著作権保護期間が満了しているため、誰でも自由に閲覧・ダウンロードが可能である。⁽²⁴⁾

コロンビア本とハーバード本の本文は同一であり、標題紙と献辞の後に「翻訳者覚書」Translator's Noteが三頁、再び標題紙を挟み、本編が五十四頁にわたって続く。翻訳者覚書と本編は黒い二重線で見取られており、それぞれの題字の下や余白には、単体では意味をなさない「客」「事」「唐行古及」などの字句が、デザイン化された漢字で（いわば金釘流で）あしらわれている。また、標題紙の前に貫之の肖像が一枚と、本編の各所にそれぞれの場面に関連づけられた十二枚の、都合十三枚の挿絵が入っている。これらは青木年雄によるペン画であるが、インクの濃淡によって水墨画風の表現がなされており、時代背景や内容にそぐわない描写もあるものの、古典文学の挿絵としてさほど違和感のあるものではない。²⁶

両本の唯一の異同はハーバード本にのみ存在する「前付け」で、竹を横した枠線のなかに、毛筆を意識した、東洋風にアレンジした英字フォントで標題を示し、その下に本編への簡単な導入と定価（五〇セント）が印字されている。この導入には興味深い点も多いので、以下に掲げ、訳出しておく。

The present widespread interest in Japan has induced The Chautauqua-Century Press to put upon the market a unique volume which contains a bit of classic Japanese literature (tenth century), illustrated by a native artist, and printed and bound in close imitation of the books issued in

Yokohama. The poet Tsurayuki describes a boat journey from a remote provincial town to the capital. The incidents of the trip are detailed with delicate humor. There is much impromptu verse-making by the passengers during a delay, and the captain, whose verses are atrocious, is highly praised by all in order to put him in good humor and hasten the journey. The translation has been very cleverly made by Mrs. Harris, for years a resident in Japan.

昨今の日本への関心の高まりに促されて、シヨトーカー・センチュリー出版でも日本古典文学の小品（十世紀のもの）と、現地の画家によつて描かれた挿絵を合わせた書物を、市場に送り出すこととなった。印刷や製本は、横浜で出版される類の書物を真似てある。歌人貫之は、遠方の地方都市から首都への船旅について語る。旅中の出来事は繊細なユーモアを交えて詳細に綴られる。旅程が滞ると船上のひとたちは即興で歌を詠むが、船長の歌はひどいものである。しかし彼の機嫌を損ねれば到着がますます遅れるので、誰しも彼の歌を褒めてやまない。精緻な翻訳は永年日本に暮しているハリス夫人によるものである。

いくつかの点について整理しておこう。まずシヨトーカー・センチュリー Chautauqua-Century という出版社名だが、これはフラッド & ヴィンセントの親会社である。当時のアメリカではシヨトーカー運

動と呼ばれる成人教育運動が盛んであったから、その関連書籍などを積極的に出版していたのだろう。

次に本書が「横浜で出版される類の書物」に似せて作られているという点だが、これは外国人居留地であった横浜には、同種の、いわば「東洋風」の書物が多く出回っているというイメージに基づいた言葉であろう。すでに英訳『土佐日記』の書籍が横浜で流通していたという意味ではない。

最後に、『土佐日記』の内容に触れている部分だが、ここでいう「船長」が原文の「楫取」を指すことは、後に続く説明から推測できる。ただ、旅の一行が楫取の機嫌をとるために歌を褒めるという場面が原文にないことは言うまでもなく、不正確なまとめである。また原文では前土佐守を指して「船のをさ」や「船君」の語が用いられるが、訳文ではそのような場合 captain ではなく master が使われている。一方、「楫取」にはより字義に近い helmsman が充てられているので、captain という単語はこの前付けにしか登場しないのである。このようにかなり大雑把であるとはいえ、好意的に見れば、この短文は『土佐日記』の魅力を面白おかしく伝えることに成功している。なお、この前付けがハーバード本にのみ存在し、コロムビア本に見当たらないのは、経年劣化による落丁と考えると問題ないだろう。

すでに述べたように、本稿には原文と訳文を詳細に比較検討する

紙幅の余裕はない。十九世紀末の時点で『土佐日記』がどのように翻訳されたかという問題は、単純に本文の解釈のみならず、当時の英語圏において日本の言葉や文化がどのように受容されていたのかを探求するうえでもきわめて重要であり、充分に別稿で論ずる価値があろう。本稿ではあくまでその下準備として、英訳『土佐日記』の成立事情を検討することを旨としたい。そこで以下では前付けと同様、本編の直前に挿入されている翻訳者覚書の内容を、左に掲げ訳出したうえで確認することとする。

Tsurayuki, one of the classical writers of old Japan, was born near the close of the 9th, and died about the close of the 10th Century. The family to which he belonged, claimed royal descent, and his personal history is remarkable for the political honors conferred upon him as well as for the fame which he justly earned by the "divine right" of genius.

While no one questions his claim to distinction as poet and critic, students of Japanese literature owe him an especial debt of gratitude. In an age when scholars were neglecting their own beautiful tongue to write in stilted Chinese, the wiser poet chose the native language treasured by the daughters of his land, as a fitting vehicle for his thoughts.

His humorous pretence of veiling his personality in feminine

garments, is a conceit not unknown in the West, but my Oriental bias leads me to fancy that it proves "a better jest" in his hands than among our own humorists. The simple chronicle of his voyage from the Province of Tosa to the Capital, penned in woman's language, became one of the classics of ancient literature.

The appended translation of the "Tosa Nikki" is as nearly literal as the differences between eastern and western languages permit. Only a master of ancient Japanese could transfer, by paraphrase, to our direct, Anglo-Saxon speech, the graceful simplicity of Tsurayuki's prose in this fragment of another age. In default of a better qualified translator in this country, at leisure for such service, it is therefore hoped that the rough version of a well-known classic may call attention to a literature almost ignored in the United States.

Perhaps, the fact that Japanese literary work of the olden time is so simple in form as to disarm criticism, may account for our neglect; the would-be critic is beguiled by its constant, delicate charm, into longing for some rugged turn of phrase or manner, to break its sweet monotony.

If American students will give thought to it, however, I think they will find in it something of the half-elusive fragrance of the snowy plum blossoms which Japanese poets delight to celebrate. Indeed, the classical literature of old Japan in its fragile loveliness, may be called the white

"plum flower" of Oriental letters.

古き日本の古典作家の一人である貫之は、九世紀の終わろうとする頃に生まれ、十世紀の終わろうとする頃に没した。皇族の裔を自認する家門に連なる彼は、個人としても目覚ましい遍歴を重ねた。政治的な栄誉を得たのみならず、天才という「神授の権利」によつて、その身にふさわしい名声をも手にしたのである。

彼が歌人として、批評家として優れていることを疑う者はないが、彼にとくに感謝すべきは日本文学の徒であろう。学者たちがまだ自国の美しい言葉よりも窮屈な漢文で書くことを選んでいた時代に、この賢明な歌人は土地の女性たちに倣い、母国語こそ自らの思想を伝えるのに適した言語であると考えたのである。

自らを女性的なヴェールで覆うという彼のユーモア溢れる作爲は西洋にも例のないものではないが、東洋を最良しがちな私の中から見ると、それは西洋のユーモア作家の場合よりも「うまくいつて」いるように思われる。土佐の国から首都までの、この単純な旅の記録は、女性の言葉で綴られ、古代文学のなかの古典となった。

以下に続く『土佐日記』の翻訳は、東洋と西洋の言語の差異が許すかぎりにおいて逐語的である。過ぎし世に書かれた貫之

の優雅で無駄のない散文を、いかにも自然に私たちのアングロ
「サクソン語の言い回しに置き換えられる者がいるとすれば、
それは相当に古代日本語に精通している者だけであろう。この
国にはそのような人材はいないし、いたとしても、このような
事業に割くだけの時間を持たないのである。米国において、こ
の著名な古典はこれまでほとんど無視されてきた。この不完全
な翻訳によって、新たに注目が集まることを願ってやまない。

おそらく、われわれがこれまで古代の日本文学を軽視してき
たのは、その批評を必要としないほどの単純さにもよるであろ
う。批評をしようと向き合ってみても、淡々とした、繊細な魅
力に呆気にとられてしまい、言葉遣いや語り口がどこかで荒々
しく方向転換をして、甘美な調子を崩してはくれぬかと期待す
るような羽目に陥るのである。

だがもし米国の学者が十分な注意を向けたならば、日本の歌
人たちが喜びとともに讃える、あの雪をかぶった梅の花のつか
みどころのない香しさに、何かしらのものを発見できるであろ
う。むしろ、その脆いほどに可憐な古代日本の古典文学こそ、
まさに東洋文学における「白梅の花」と形容するにふさわしい
ものなのだ。

冒頭でハリスが示す漢字と仮名の関係に対する理解の正確さには

賞賛に値するものがある。また、ハリスには自分は決して文学の専
門家ではないという自覚があるため、翻訳の出来に対してあくまで
謙虚な姿勢をとっていることがわかる。ハリスは本書をきっかけに、
より十分な資質を持った翻訳者や研究者が登場することを期待した
のである。

だが残念なことにこの覚書の文言だけでは、ハリスがどのよう
に『土佐日記』に関心を持ち、どのようにその翻訳を進めたのかにつ
いて、ほとんど理解することができない。そもそも一八八二年には
一応の完結を見ていた英訳を、単行本にまとめるのに九年もの歳月
を要したのは何故なのだろうか。その辺りの事情は、覚書では一切
触れられないのである。

これらに関しては三つ目の英訳である一九一〇年刊行の『土佐日
記』を見れば、いますこし明確な情報が得られるであろう。

四 ハリス訳『土佐日記』（一九一〇年版）

新版『土佐日記』の英訳は表紙には *Tosa Nikki on the Log of a Japanese Journey* すなわち『土佐日記あるいは日本の旅の日誌』と記されてい
るが、本文の扉には旧版と同じ *Log of a Japanese Journey from the Province of Tosa to the Capital* の題が印字されており不統一である。版元は銀座
の教文館であり、こちらは日本で出版されている。奥付を見ると刊

行は「明治四十三年九月二十八日」とある。装丁は旧版よりも凝っており、表紙に竹の軸を通し、そこに固定した糸で全体を束ねるといふ、和綴じを意識した造本になっている。本書は青山学院大学院図書館にも所蔵されているが、本稿で言及するのは、メリマンから某アレキサンダー夫人に贈呈されたものを、現在の所蔵先であるグティ研究所が電子化し、インターネット・アーカイブに公開している版である。こちらも先に取り上げた一八九一年版同様、著作権保護期間満了に伴い自由に閲覧・ダウンロードが可能となっている⁽²⁾。

本書も献辞、翻訳者覚書、本文から成り立っていることは旧版と同様だが、ハーバード本に見られたような前付けはない。また、冒頭に菊池容斎画の貫之像がある他には、挿絵は一葉もない。ところが扉を見ると、With Illustrations By Toshio Aoki (挿絵 青木年雄)と書かれているのである。活字は旧版と異なるので新たに組んだ扉であることは疑いを容れないが、旧版の記載内容を十分に確認しないまま、ありのままに再現してしまったのだろう。

実はこのような粗雑さは、本文でも随所に見られるのである。一九一〇年版には一八九一年版からの改変は少なからずあり、大まかな意識であったものがより逐語訳に近い文章に置き換わるなど、質の向上が図られているが、それでも大部分はそのままの形で引き継がれている。ところがその際に「l」と「r」、「u」と「n」などと、字形の似たアルファベットが取り違えられ、結果的に書物とし

ての程度を下げてしまっているような箇所が多くあるのだ。版元が日本の出版社であることを思えば、植字の際に、英文に不慣れな者が作業に当たったがゆえの誤植と考えるのが至当だろう。

さて翻訳者覚書に目を向けたい。その前半と末尾には旧版との重複も少なくないが、それ以上に付け加えられている部分も多いので、再び以下に全文を掲げ訳出する。なお、和訳についてのみ、異同箇所を傍線を引く。

Tsurayuki, one of the classical writers of old Japan, was born near the close of the 9th, and died about the middle of the 10th Century. The family to which he belonged, claimed royal descent, and his personal history is remarkable for the political honors conferred upon him as well as for the fame which he justly earned by the "divine right" of genius.

While no one questions his claim to distinction as poet and critic, students of Japanese literature owe him an especial debt of gratitude. In an age when scholars were neglecting their own beautiful tongue to write in stilted Chinese, the wiser poet chose the native language treasured by the daughters of his land, as a fitting vehicle for his thoughts.

His humorous pretence of veiling his personality in feminine garments, is a conceit not unknown in the West, but my Oriental bias

leads me to fancy that is[sic] proves “a better jest” in his hands than among our own humorists. The simple chronicle of his voyage from the Province of Tosa to the Capital, penned in woman’s language, became one of the classics of ancient literature.

The appended translation of the “Tosa Nikki” was first printed many years ago, thorough the courtesy of the Editor of the “Japan Mail.” A master himself in the Japanese language, he accepted the work of a mere novice in “things Japanese,” with all its necessary imperfections.

About the time the last paragraphs were placed in the printer’s hands, a ship bore away the writer from the land of Tsurayuki. An enforced absence from Japan of nearly a quarter of a century prevented continued work, and the little beginnings made in classical study slipped away like a dream: otherwise the quaint Diary would long ago have been revised. In 1891, the translation was published by the firm of Flood and Vincent, in the United States, to preserve it in more permanent form and with a vague hope that in default of a better qualified translator there, at leisure for such service, the rough version of a famous classic might call attention[sic] to a literature almost ignored in my country.

The little volume is now out of print, and although Dr. Aton[sic] has preserved its substance in his fascinating “History of Japanese Literature,” I venture to offer the “Diary” in a form which it is hoped

may prove of some service to students.

To Prof. Bessho of Aoyama Gakuin, I am indebted for valuable criticism and assistance in a partial revision of the book. It is not claimed that the translation is literal: it is only as nearly so as the difference between modern English and classical Japanese permit: and the writer is painfully conscious that the atmosphere of Old Japan has somehow vanished from its pages.

Only a master of ancient Japanese could transfer by paraphrase to our direct Anglo-Saxon speech the graceful simplicity of Tsurayuki’s prose in this fragment of another age.

Criticism of the original is almost as difficult: in fact, all purely Japanese literary work of the olden time is so simple in form as to disarm criticism. The would-be censor is beguiled by its delicate charm into longing for some rugged turn of phrase, or manner, to break its sweet monotony.

If students will give thought to it, however, I think they will find in it something of the half-elusive fragrance of the snowy plum blossom which Japanese poets delight to celebrate. Indeed, the classical literature of Old Japan, in its fragile loveliness, may be called the white “plum flower” of Oriental letters.

古き日本の古典作家の一人である貫之は、九世紀の終わろう

とする頃に生まれ、十世紀の半ば頃に没した。皇族の裔を自認する家門に連なる彼は、個人としても目覚ましい遍歴を重ねた。政治的な榮譽を得たのみならず、天才という「神授の権利」によつて、その身にふさわしい名声をも手にしたのである。

彼が歌人として、批評家として優れていることを疑う者はないが、彼にとくに感謝すべきは日本文学の徒であろう。学者たちがまだ自国の美しい言葉よりも窮屈な漢文で書くことを選んでいた時代に、この賢明な歌人は土地の女性たちに倣い、母国語こそ自らの思想を伝えるのに適した言語であると考えたのである。

自らを女性的なヴェールで覆うという彼のユーモア溢れる作爲は西洋にも例のないものではないが、東洋を最眞しがちな私の目から見ると、それは西洋のユーモア作家の場合よりも「うまくいって」いるように思われる。土佐の国から首都までの、この単純な旅の記録は、女性の言葉で綴られ、古代文学のなかの古典となった。

以下に続く『土佐日記』の翻訳は、『ジャパン・メール』編集者の厚意によつて、かなり以前に初めて活字になったものである。自身も日本語の達人であった彼は、「日本的なるもの」の初心者に過ぎない私の未熟な仕事を、あるがままに受け入れてくれた。

最後のいくつかの段落を印刷所に手渡ししたところで、一隻の船が筆者を貫之の国から運び去った。ほとんど四半世紀にわたり日本から引き離されていたため、仕事を続けることは難しかった。古典についてすこしは学んだことも、すっかり夢のように忘れてしまったのである。さもなければこの趣深い日記に、つとに推敲を加えていただろう。一八九一年に、米国のフラツド・アンド・ヴィンセント社から翻訳を出版したのは、訳稿をしつかりと保存するためであった。現地にはそのような事業に時間を割ける有能な翻訳者もいないので、不完全な訳ではあつても、私の国ではほとんど無視されてきたこの著名な古典が、すこしでも注目を浴びればという願いもあつた。

その小著もいまでは絶版となった。アトン博士アトントンがその精髓を大著『日本文学史』に留めているとはいへ、私は日本文学の徒に何らかの形で役立ててもらえればと、このような形でここに「日記」を奉ずるものである。

有益な批評をたまわり、また若干の改稿に際してお力添えをいただいた青山学院の別所教授には感謝している。本書の翻訳は逐語訳ではない。現代の英語と、古代の日本語の差異が許すかぎりにおいて逐語的である。だが本書の頁から、古き日本の雰囲気がある程度まで失われてしまっていることは、筆者も痛いほど承知している。

過ぎし世に書かれた貫之の優雅で無駄のない散文を、いかにも自然に私たちのアングロ・サクソン語の言い回しに置き換えられる者がいるとすれば、それは相当に古代日本語に精通している者だけであろう。

原典を批評することもまた同様に難しい。事実、純粋に日本的な古代の文学はあまりに単純な形式を持つため、批評をする気が失せてしまう。読んでみようと思き合ってみても、淡々とした、繊細な魅力に呆気にとられてしまい、言葉遣いや語り口がどこかで荒々しく方向転換をして、甘美な調子を崩してはくれぬかと期待するような羽目に陥るのである。

だがもし学者が十分な注意を向けたならば、日本の歌人たちが喜びとともに讃える、あの雪をかぶった梅の花のつかみどころのない香しさに、何かしらのものを発見できるであろう。むしろ、その脆いほどに可憐な古代日本の古典文学こそ、まさに東洋文学における「白梅の花」と形容するにふさわしいものなのだ。

一読してわかるように、新版の覚書に追加された部分は、いずれも英訳『土佐日記』の成立事情に関わる部分である。

ハリスは一八八二年三月、病のため単身アメリカに帰国し、一九〇五年まで同地に留まっていた。『ジャパン・メール』での連

載最終回も同月であるから、まさに原稿を受け渡した直後の出国であつたのだろう。その原稿をまとめなおし、旧版『土佐日記』を出版したのが一八九一年であつた。

ハリスの在米中に、日本国外における『土佐日記』の存在感は以前よりもやや大きなものとなっていた。「アトン」Atonと誤植されているが、一八九九年にウィリアム・ジョージ・アストン（一八四一—一九一〇）による『日本文学史』が出版され、そこに『土佐日記』も取り上げられたのである。アストンはアーネスト・サトウ（二八四三—一九二九）やバジル・ホール・チェンバレン（一八五〇—一九三五）と並ぶ初期の著名なジャパノロジストであり、一八六四年に英国公使館の通訳に就任して以来、日本語および日本文学について多くの研究成果を上げている。³⁰⁾

アストンの手になる『日本文学史』は、『古事記』『日本書紀』から語り起こし、明治時代の『多情多恨』『新体詩抄』までを取り上げる網羅的な研究書であるため、『土佐日記』についても全訳ではなく、解説に抄訳を散りばめた要約の形で収録されている。とはいえ、『土佐日記』に十頁を割いたうえで、別の箇所では『古今和歌集』を取り上げながら、貫之の和歌への貢献を正確に論じているのだから、ハリスが同書にかなりの刺激を受けたことは想像に難くない。ハリスが自らの仕事を再び世に問うた背景には、古典や言語に関する知識ではアストンに及ばずとも、早くから『土佐日記』に向

き合ってきた自らの業績を、はつきりと形に残したいという思惑もあつたのではないだろうか。

覚書で最後に注目すべきは、「青山学院の別所教授」という固有名詞である。別所にはハリスの弔辞を読んだ人物として本稿でもすでに言及しているが、ハリスが協力者として個人の名前を挙げるのは、後にも先にもこのときだけである。新版の覚書にのみ別所の名が登場するということは、二人の関係がいつから始まったものであるにせよ、『土佐日記』の訳文についてハリスが意見を乞うたのは旧版の成立後であると推測することができる。この点については、次節でさらに検討することしよう。

以上、新版『土佐日記』について概観した。なおハリスは出版前年に死去しているから、この三つ目の英訳『土佐日記』は死後出版であり、その意味では訳者のなかでまだ推敲の余地を残していた可能性も否めないのである。

次節では全体のまとめに入るまえに、三種の英訳『土佐日記』をハリスの生涯に改めて位置づけつつ、当時のジャパノロジーの状況を確認しておきたい。

五 ハリスとジャパノロジー——『土佐日記』の位置

ハリスの日本文化への造詣の深さや、それにもまして異文化に示

した敬意の深さは、『はりす夫人』にしばしば美談調で記されている。これを信ずるならば、ハリスは座布団を用いるときは必ず正座をし、畳に上る際は勧められても上靴を履かなかつたという。目と毛髪が黒く、小柄であつたため、身体的にも日本人に親近感を覚えたとされる。

また、生徒に対して日本語で訓話を行ったことから、相当の日本語運用能力があつたことは確かであろうが、その方面の才能を称える挿話も『はりす夫人』には事欠かない。例えば「ありがたうござる」と言うところを「蟻十疋に猿五疋」と言い換えたという機知が披露されているし、新渡戸稲造が寄せた序文によれば、まるで『枕草子』に描かれる教養の理想を体現するかのよう³¹⁾に、『古今集』の歌などもすらすらと暗唱したようである。

断片的な証言は他にも多くある。学生時代にメリマンに洗礼を受けた植物学者の宮部金吾（一八六〇—一九五二）は、「夫人の日本文学殊に和歌に長ぜられし事に就き頗る敬服」したと述べる³²⁾。自由民権運動に関わり、サンフランシスコで激しい明治政府批判を行う邦字新聞『新日本』を発行していた広田善郎は、「夫人は嘗て紀貫之の土佐日記を翻訳して之れを母堂に呈せられし事あり、其構文の簡潔雅麗にして而かも秀勁なる、余は之を読んで殆ど羅句語にて綴りたる紀行文に接せしが如き心地せり」と賞賛を惜しまない³³⁾。また牧師で雑誌『護教』の編集にも携わつた中村忠蔵は、「夫人は略ぼ我

邦の歴史に通じ略ぼ我邦の文学を解し殊に古風俗を愛し古武士の精神を尊び、古来の美術をめ、かねて我国の風光を嘆美し、冷静なる批評家をして云はしむれば殆んど日本狂とも云ふべきほどに日本国を愛せり」と力強い。³⁴⁾

必ずしも史料的な裏付けのない記憶による証言や、弔辞という故人への感情が最も昂ぶる瞬間に綴られる言葉を、すべて鵜呑みにすることが危険であることは言うを俟たない。ただ、少なくともハリスの言語的・文学的な才覚については、すでに一八八二年の時点で『土佐日記』の翻訳を果たしていることに鑑みても、あまり疑う必要はないだろう。ここで再び、第二節でも引いた別所梅之助の弔辞を、いまずこし先まで引いてみる。

その土佐日記の英訳は、明治廿四年米国の出版にかゝるといへども、実は明治十四年、国学復興以前の稿にかゝる。故人はもとより活字本にて国文を研究するが如き便宜を有せざりしなり。さるを千年以前の古文を訳して新色あらしめ、ことに短歌の訳にいたりては讚嘆すべきもの少からず、晩年之を訂正せんとす。稿は去歳を以てなりしも、いまだ世に問ふにいたらず。³⁵⁾

別所はメソジスト監督教会の牧師であり、一九三一年版の『賛美歌』編纂や聖書の翻訳にも従事した人物であるが、幼時には漢学・

国学にも親しみ、国文学についても独学ながらこれを修め、青山学院および女学院で教壇に立った。³⁶⁾ その来歴から別所とハリスが会うのは必然であったと言つてよいだろうが、別所は旧版『土佐日記』が出版された翌年の一八九二年、二十歳の頃に愛知に居を移しており、再び上京して青山学院の教師となつたのは一九〇一年のことであるから、³⁷⁾ 交流が始まつたのはハリスの「帰朝」した一九〇五年以降のことであろう。

別所とハリスの協働の果実は『土佐日記』だけではない。やはり教文館から一九〇六年に対訳本として刊行された詩集 *Songs of War-time* すなわち『戦時の歌』でも、別所がその和訳に携わっているのである。「戦時」とは言うまでもなく日露戦争のことで、ハリスが日本に声援を惜しまなかつたことは先にも述べた。再来日が戦争終結の直後であつたのも、あるいは戦争が日本への思いを鼓舞したゆえかもしれない。

短期間ではあるが濃密であつた別所との関係が、ハリスの「代表作」である英訳『土佐日記』にも活かされたことは自然であろう。四半世紀ぶりに日本へ戻つたハリスは、すでに余命があまり残されていないことを医師に告げられていた。その間に完遂したいことの一つが、『土佐日記』の再刊であつた。別所は、「晩年之を訂正せんと」するハリスを喜んで援助したのである。そして、葬儀の時点では「いまだ世に問ふにいたらず」なかつた新版は、無事に教文館から

日の目を見た。

なお別所の言う「国学復興」とは、明治時代に入り徐々に活版印刷が浸透し、古典が翻刻出版されるようになった時期を指す。³⁸『土佐日記』の場合で見ても、活字本としては最初期と思われる鈴木弘恭編『標註国文抄』（敬文堂）、斎藤普春編『纂註土佐日記』（学友館）、増田于信編『校訂標註土佐日記』（誠之堂）などはいずれも一八九一年刊行であり、ハリスが訳業の当初からそのような資料を参照することは不可能であった。『はりす夫人』にある証言を総合すると、ハリスは日本語を書くことはできたようだが、ローマ字を用いることも多かつたと思われる。また友人に朗読を頼み、発音を書き取って記録する、という方法で「読書」を愉しむこともあったようだ。とはいえ、むろん自力でも相当程度の読解ができなければ、一冊の書物を翻訳することは無理である。ハリスの能力は、同時代の著名なジャパノロジストに、さして引けを取るものではなかっただろう。

では当時のジャパノロジは、どのような状況にあったのか。ここで挙げるべきは、やはりハリスの覚書にも登場するアストンであろう。

一八七五年六月三十日、アストンは日本アジア協会において、*Ancient Japanese Classic* すなわち「ある日本古典」という報告を行なっている。³⁹これは先に取り上げたアストンの『日本文学史』のう

ち、『土佐日記』について書かれた箇所の第一稿とも言うべきもので、日本の歴史や、日本語および韓国語の文法などに関する報告はすでに経験していたアストンにとって、初めて古典文学を本格的に論ずる機会でもあった。

貫之は『土佐日記』において女性の立場から日記を書くという試みに臨んだ、と語り起こすアストンは、本文からいくつかの印象的な場面を紹介する形で論を運んでいる。文学史に関する部分には、あたかも貫之以前には男性が文学に関わることはなかったと言わんばかりの誇張と曲解があるものの、報告の全体は今日の通説に照らしても決して不正確なものではない。結びは以下のようなものである。

I may observe in conclusion that the Japanese of the *Tosa Nikki* is on the whole tolerably easy, and it may be recommended as a good book with which to begin the study of the ancient literature of Japan.

結論として述べるならば、『土佐日記』の日本語はさほど難しいものではなく、これから日本の古典文学を学ぼうとする者に良書として勧められるものと思う。

この報告が行なわれた当時、ハリスは北海道にいた。だが在日外国人のコミュニティの緊密さを思えば、その議事録がすぐにハリス

の目に触れたとしても不思議ではない。さらに一八七九年五月十三日の総会ではハリスの夫メリマンの協会入会が認められているから、それ以降であればなおさらである。なお入会時期は、船上で娘を喪うという体験を経て日本へたどり着き、東京に居を構えた直後に当たる。

自らも日本文学に関心を持つ者として、ハリスは協会の活動に注意を払っていただろう。ハリスが『土佐日記』を知ったのがアストンの報告によってであった可能性も、当然ながら考慮してみるべきである。少なくともハリスの訳業以前に『土佐日記』に言及する日本アジア協会の資料は、管見のかぎりこの一点しか存在しない。いずれにせよハリスは、アストンのいう「良書」を自らの運命の書物として手に取り、大きな情熱を傾けることになる。

六 結論と展望

ハリスは自ら文学者を以て任じていたわけではなかった。少なくとも英訳『土佐日記』の覚書を信ずればそうなるが、実際、それは謙遜とばかりは言えないのである。

ハリスは生涯の第一の務めとして、メリマンの伝道活動を支え続けた。メリマンは日本及び朝鮮半島の宣教師を束ねる立場にまでたどりつめ、在日外国人のなかでも著名な存在となっていた⁴¹。だが

ハリスは、決して夫の陰に隠れていたわけではない。日々学校や海岸女学校の創設・拡充に代表されるように、女子教育への献身と貢献には多大なものがある。また本稿では割愛したが、帰米してカリフォルニア州オークランドで静養していた時期にも、現地で慈善活動に従事しつつ、在米日本人のよき相談相手となった。さらには再来日の直後、一九〇五年から翌年にかけての東北飢饉の際には、義援金の調達にも奔走している⁴²。

日本の国土は今日まで多くの偉大なる恋愛者を有せり。其中に、且つ其首位に於て、繊弱なる米国婦人にして又宣教師たりしフロラ・ベスト・ハリスの名は記載せられざるべからず⁴³。

内村鑑三によるこの追悼の言葉にも現れているように、多岐にわたるハリスの活動はその多くが日本という国に結びついていた。日本の利益になることであれば、ハリスはどのような事業にも打ち込んだであろう。そのなかにあつて文学は活動の一つに過ぎず、また教育や慈善に比べれば個人的な事業でもあつたために、優先順位は必ずしも高くなかつたかもしれない。それでも、賛美歌を作詞し、内外の紙誌に詩を投稿したのみならず、前述の『ヒーザン・ウーマンズ・フレンド』に設けられた子供欄に「舌切り雀」など童話の英訳を掲載したり、国内で最初期の児童向け伝道冊子である『よろこ

ばしきおとづれ』に寄稿したりと、ハリスの文業は決して少なくな
い。⁴⁵

だが、社会的な評価はどうか。冒頭にも述べたように、ハリスは
あくまで「メリマンの妻」である。右に挙げた媒体も、「女性」や
「子供」といった主体と結びついたものが目につく。女性であるハ
リスには、そもそも日本アジア協会の会員となることさえ不可能
だった。弔辞のような、いわば記念的な場合を除いて、文学者とし
てのハリスが評価されたことはほとんどないのである。

ハリス自身がときおり詩を発表していた『オーヴァーランド・マ
ンスリー』誌の一八九二年二月号に掲載された『土佐日記』の書評
は、その意味で例外的なものと言つてよい。匿名の評者によるその
書評は充実したものは言い難く、基本的にはハリスの「覚書」と、
本文の一部を引いて構成したものである。ただ、学者が漢字を使う
時代に平仮名で物語を書いた貫之を、ラテン語ではなく英語で書い
たチョーサーに喩え、また『土佐日記』の内容にヴィクトリア朝時
代の文学に近いものを見出すところなどは、海外における貫之の初
期の受容を示す資料として興味深いものがある。⁴⁶

一つ気になるのは、アストンはハリスをどのように評価していた
のか、という点である。『日本文学史』の他の箇所を見ると、例え
ば『竹取物語』の項目ではディキンズを、『源氏物語』の項目では
末松謙澄を、という具合に、アストンは先行する翻訳者の氏名をき

ちんと掲げている。⁴⁷ところが『土佐日記』に関しては、ハリスは一
切言及されないのである。当時のジャパノロジーの中心的人物で
あつたアストンが、アジア協会の会員の妻でもあるハリスの業績を
知らなかったとは考えにくい。つまり非学識者の、非会員の、ある
いは非男性の訳業として、故意に言及しなかつた可能性もあるのだ。
最後に付け加えるならば、一九一〇年版『土佐日記』にしても、

伝記『はりす夫人』にしても、それらはメリマンの希望で世に出た
ものであつた。また後者の筆を執つた山鹿旗之進にしる、翻訳を助
けた別所梅之助にしる、ハリスに協力と賛辞を惜しまなかつた人々
は、いずれもメソジスト教会の関係者であつた。『土佐日記』の英
訳を通して時代と文化を易々と越境したかに見えるハリスだが、一
方では百年余の昔を生きた聖職者の妻として、小さな共同体に閉じ
こもつて一生を送らざるを得なかつた、とも言えるのである。

今日、ハリスは忘却の淵にある。海外の専門書で『土佐日記』に
ついて知ろうとすれば、定訳となりつつあるマツカラの業績や、そ
れに先駆ける試みとしてマイナーなどによる翻訳が頻繁に紹介され
る一方で、ハリスの訳業が見落とされている例はめずらしくなく、
またハリスその人も、とくに日本を一步出れば、歴史に名を刻んだ
とは言い難い。だが『土佐日記』がハリスによつて初めて英訳され
たことは動かしがたい事実である。それは取りも直さず、『土佐日
記』が初めて外国語に訳された機会でもあつた。そのことの意味は

大きい。

付記 本研究は、JSPS科研費(課題番号JP19K13150)の助成を受けている。
なお本稿は平成31年度中古文学会春季大会(二〇一九年五月十九日、於
立女子大学)での報告「フロラ・ハリスによる英訳『土佐日記』について」
を出发点とするものである。

注

- (1) 川勝麻里『明治から昭和における「源氏物語」の受容——近代日本の文
化創造と古典』和泉書院、二〇〇八年。ただしデイキンズ訳『竹取物語』
は単行本として出版される前年に、王立アジア協会の機関誌に掲載されて
いる。書誌は以下の通り。Dickins, F. "The Story of the Old Bamboo-Hever.
(Takatori no Okina no Monogatari.) A Japanese Romance of the Tenth Century." *The
Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 19(1), new series, 1887,
pp. 1-58.
- (2) 近年、研究は充実しつつある。例えば、以下のようなものが挙げられ
る。Henriuk, Valerie L. "A Creditable Performance under the Circumstances?
Suematsu Kenchō and the Pre-Waley Tale of Genji." *TTR: Translation, Terminologie,
Réédition*, 23(1), 2010, pp. 41-70; Emmerich, Michael. *The Tale of Genji: Translation,
Canonization, and World Literature*. New York, NY: Columbia University Press, 2013;
Kinoshita, Yukiko "Reading Intercultural, Intergenerational and Intersexual Woolf:
Virginia Woolf's "The Lady in the Looking-Glass" Oscar Wilde's "The Sphinx without
a Secret," and Lady Murasaki's Yugao," in Wilson N. and Claire Battershill eds.,
Virginia Woolf and the World of Books. Liverpool: Liverpool University Press, 2018, pp.
260-267.

- (3) 以下について書誌を掲げたい。Aston, W. G. *A History of Japanese Literature*,
London: William Heinemann, 1899; Porter, William N. *The Tosa Diary*. London:
Henry Frowde, 1912; Sargent, G. W. "Tosa Diary" in Keene, Donald ed. *Anthology of
Japanese Literature*, New York, NY: Grove Press, 1955; Miner, Earl "The Tosa Diary,"
Japanese Poetic Diaries, Berkeley and Los Angeles, CA: University of California Press,
1969; McCullough, Helen Craig. "A Tosa Journal," in *Kokin Wakashū: The First
Imperial Anthology of Japanese Poetry*, Stanford, CA: Stanford University Press, 1985.
- (4) Harris, Flora Best. *Poems*. New York, NY: Methodist Book Concern, 1913.
- (5) 同大学は一九二九年に閉校となったことら、Leinawer, Chad A. "Irving
College: Its Life, Its Study, Its Women," master's thesis, Northeastern University, 1998.
- (6) 高畑美代子「イザヘラ・バードに会った3人のクリスチャン学生と弘前
教会・東奥義塾の活動」『弘前大学大学院地域社会研究科年報』二号、
二〇〇五年、三七—六〇頁。
- (7) Harris, Flora Best. "How are We to Reach the Women?" *Heathen Women's Friend*,
Vol. VIII, No. 4, Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal
Church, October 1876, pp. 80-81.
- (8) 「歴史沿革」学校法人遺愛学院 <http://www.iajoshi-h.ed.jp/main/about/history.html> (二〇二〇年三月三十一日取得)。
- (9) この問題に関しては、拙著『紀貫之』(東京堂出版、二〇一九)第九章を
参照。
- (10) Sears, Karen K. "Providence Has Freed Our Hands." *Women's Mission and the American
Encounter with Japan*, Syracuse, NY: Syracuse University Press, 2008.
- (11) Baker, Frances J. *The Story of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist
Episcopal Church, 1869-1895*. Cincinnati, OH: Curts & Jennings, 1895.
- (12) 山鹿旗之進『はりす夫人』教文館、一九二一年、一五七頁。引用に際し
ては、仮名遣いは原文のままとし、漢字のみ新字に改めた。
- (13) 五十近くが判明しているハリス作詞の賛美歌は、以下のデータベースで

一覧である。 https://hymnary.org/person/Harris_FLB?ab-texts (二〇二〇年四月十八日取得)。

(14) 山鹿旗之進『はりす夫人』、一五八頁。

(15) 同書、「凡例」。

(16) 同書、一八三頁。

(17) 「日曜講壇『國民新聞』一九〇九年九月十二日」。

(18) 伊藤鉄也(編)『日本古典文学翻訳事典1〈英語改訂編〉』国文学研究資料館、二〇一四年。

(19) France, P. and Kenneth Haynes eds., *The Oxford History of Literary Translation in English*, Vol.4, 1790–1900, Oxford: Oxford University Press, 2006, p. 366.

(20) Hoare, James, *Japan's Treaty Ports and Foreign Settlements: The Uninvited Guests, 1858–1899*, Folkestone, Kent: Japan Library, 1994.

(21) *The Japan Weekly Mail Reprint Series 1: 1870–1899; Part 3: 1880–1884 in 12 volumes*. Tokyo: Edition Synapse, 2006.

(22) 例えばチェンバレンは、日本アジア協会で以下の報告を行なった一八八五年三月の時点でも、『ジャパン・メール』紙に発表された『土佐日記』の翻訳は匿名であると述べており、ハリスの名は挙げていない。

Chamberlain, Basil Hall “On the Various Styles Used in Japanese Literature,” *Transactions of The Asiatic Society of Japan*, Vol. XIII, Yokohama: R. Meikidojin & Co., 1885, pp. 90–109. なお筆者がこの資料に触れたのは『土佐日記』の連載時期を特定した後であったが、チェンバレンは報告のなかでそれが一八八二年の一月から三月にかけて連載されたことにも言及している。

(23) 拙訳。以下も同様。

(24) 前掲拙著。

(25) 書誌とURLは次の通り。 *Log of a Japanese Journey from the Province of Tosa to the Capital*, Meadville, Pa: Flood & Vincent, 1891. <https://books.google.co.jp/books?id=CRRAAAAVAAJ&hl=ja&pg=PP1#v=onepage&q&f=false> (「ロンドン」本、二〇二〇

年四月十一日取得)。 <https://books.google.co.jp/books?id=FigNAAAAYAAJ&hl=ja&pg=PP1#v=onepage&q&f=false> (「ハーバード」本、二〇二〇年四月十一日取得)。

(26) 標題紙などに Toshio Aoki と示されている通り、挿絵画家は青木年雄(一八五四—一九二二)である。青木は一八八〇年頃に渡米した日系一世であり、上流階級の人士を相手に肖像画や日本風の風俗画などを描き、かなりの成功を収めた。青木については Foxwell, Chelsea “Crossings and Dislocations: Toshio Aoki (1854–1912), A Japanese Artist in California,” *Nineteenth-Century Art Worldwide*, Vol. 11, No. 3, Autumn 2012 を参照。 <http://www.19thc-artworldwide.org/index.php/autumn12/foxwell-toshio-aoki-a-japanese-artist-in-california> (二〇二〇年一月八日取得)。

(27) Rieser, Andrew. *The Chautauqua Moment: Protestants, Progressives, and the Culture of Modern Liberalism, 1874–1920*. New York, NY: Columbia University Press, 2003.

(28) 書誌とURLは次の通り。 *Tosa Nikki or the Log of a Japanese Journey*, Tokyo: Kyobunkwan, 1910. https://archive.org/details/gri_000033125008623346 (二〇二〇年四月十一日取得)。

(29) Aston, A *History of Japanese Literature*. (和訳は『日本文学史』柴野六助訳、大日本図書、一九〇八年)。

(30) 楠加重敏『W・G・アストン——日本と朝鮮を結ぶ学者外交官』雄松堂出版、二〇〇五年。

(31) 山鹿旗之進『はりす夫人』、一五七頁。

(32) 同書、二二八頁。

(33) 同書、二二九頁。ここでは「廣田善朗」表記である。広田については新井勝紘「自由民権期における在米・在布日本人の権利意識」(『国立歴史民俗博物館研究報告』三五集、一九九一年、五四五—五九七頁)などを参照。なお旧版・新版ともに、英訳『土佐日記』には母宛の献辞がある。

(34) 同書、二三六頁。中村については川崎司「高木王太郎の足跡をたどって——一九〇四年～一九〇六年」(『聖学院大学論叢』二三巻一号、二〇〇九年

- 一三七—一五三頁)などにわずかに記述がある。
- (35) 同書、一八三頁。
- (36) 笠原芳光「文人キリスト者別所梅之助」『キリスト教社会問題研究』三七号、一九八九年、四一—四三〇頁。
- (37) 同前。
- (38) この時期の印刷技術や出版事情に関しては、引野亨輔「日本近代仏書出版史序説」『宗教研究』九〇巻一号(二〇一六年、一—二六頁)などを参照。
- (39) Aston, W.G. "An Ancient Japanese Classic: The 'Tosa Nikki,' or Tosa Diary." *Transactions of The Asiatic Society of Japan*. Vol. III Part II, Yokohama: R. Meiklejohn & Co., 1884, pp. 109-117.
- (40) *Transactions of The Asiatic Society of Japan*. Vol. VII, Yokohama: Lane, Crawford Co., 1879, p. 337.
- (41) Bakerl, Oliver S. ed. *The Methodist Year Book*, New York and Cincinnati: The Methodist Book Concern, 1921.
- (42) 飢饉の際、キリスト教関連の団体など外国人のほうから日本政府より援助に熱心な向きがあったことに関しては、M・ウィリアム・ステイール『明治維新と近代日本の新しい見方』(東京堂出版、二〇一九年)第八章を参照。
- (43) 内村鑑三「故ハリス夫人 回想(訳文)」『内村鑑三全集』第十五巻、岩波書店、一九三二年、三三—三九頁。初出『聖書之研究』第一一三号、一九〇九年。引用に際しては、仮名遣いは原文のままとし、漢字のみ新字に改めた。
- (44) 齋藤元子「メソジスト監督派教会女性海外伝道運動への来日宣教師夫人の貢献」『ウエスレー・メソジスト研究』一〇号、二〇〇九年、八五—九七頁。
- (45) 柿本真代「よろこばしきおとつれ——児童雑誌の源流」『キリスト教社会問題研究』六一号、二〇一三年、六七—九〇頁。
- (46) "Tsurayuki's 'Tosa Nikki,'" *The Overland Monthly*, Vol. XIX, Second Series, January-June 1892, San Francisco, CA: Overland Monthly, 1892, pp. 664-665.
- (47) Aston, A *History of Japanese Literature*, pp. 76, 92.
- (48) 一例として、Miyake, Lynne N. "The Tosa Diary: In the Interstices of Gender and Criticism," in Schalow, P. and Janet Walker eds. *The Woman's Hand: Gender and Theory in Japanese Women's Writing*. Redwood City, CA: Stanford University Press, 1996, pp. 41-73が挙げられよう。ジェンダー研究の視点をとる論集であるにもかかわらず、ハリスの存在は見落とされている。